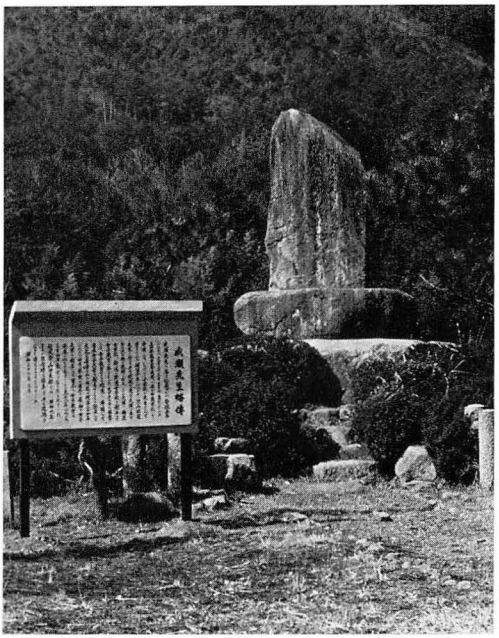
成瀬仁蔵著作集

第一巻

成瀬仁蔵先生（大正七年）

泉山の麓（成瀬先生生誕地・山口市吉敷）

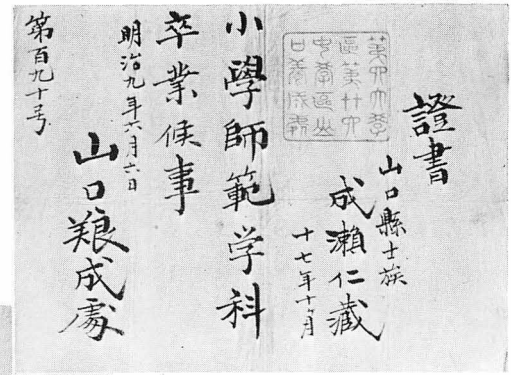
先生の学ばれた藩学憲章館趾（吉敷小学校内）



成瀬先生誕生地記念碑（昭和九年除幕）

姉 鈴木久子（昭和11年頃）

成瀬先生の父君、成瀬小左衛門



證書

山口縣士族
成瀬仁藏
十七年十月

小學師範学科
卒業候事

明治九年六月六日
山口縣成處

第百九十号

山口県山口養成処卒業証書

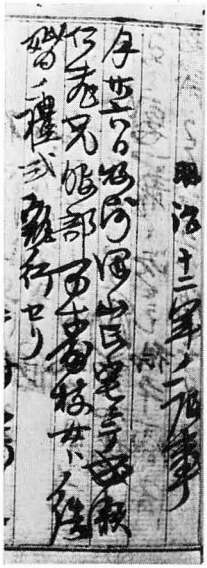
成瀬仁藏

第十一大區二嶋小
學訓導申付候

明治十年一月十日
山口縣

山口県二島小学校訓導辞令

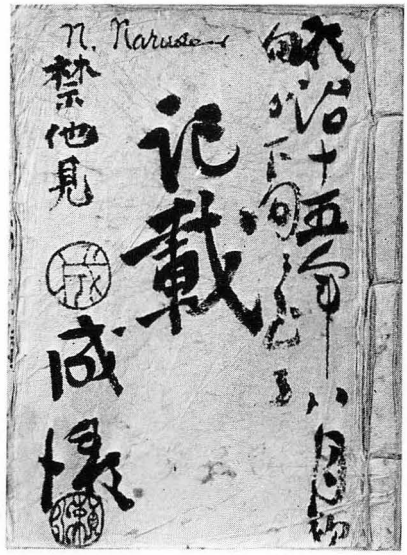
結婚当時の先生御夫妻



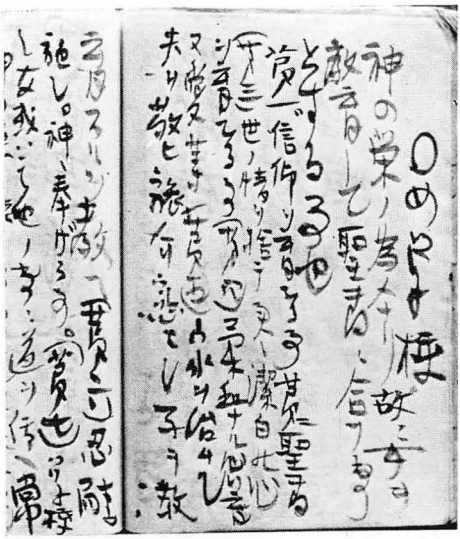
結婚の記事（浪花教会記録・浪花教会蔵）

先生と親戚の人々（京都にて）
後列中央が先生・左万寿枝夫人、右夫人弟服部他之助
前列右より服部夫人、同娘昌子（後中島夫人）夫人祖母、同叔母

梅花女学校同窓会（明治三十四年於東京山王境内）



明治十五年日記表紙



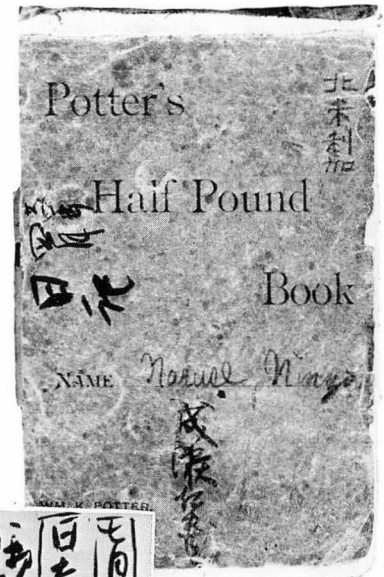
同右記事（本文 282 頁）

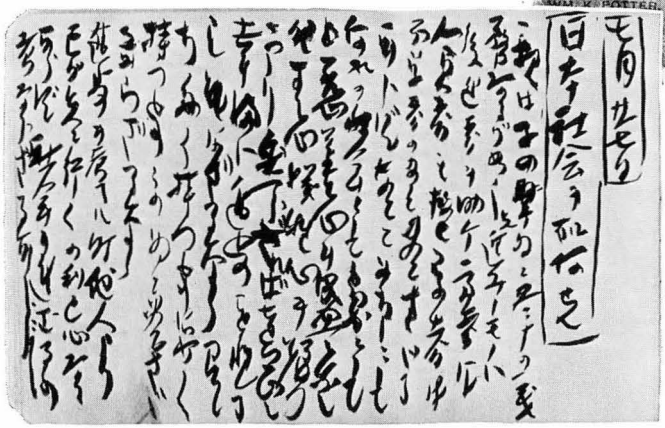
明治十七年頃の先生（二十六才頃）

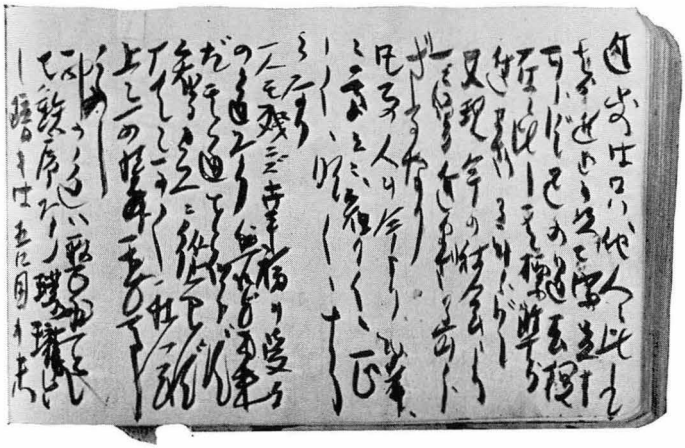
日記その他
（明治十年代）

米国留学中の先生（三十三才頃）

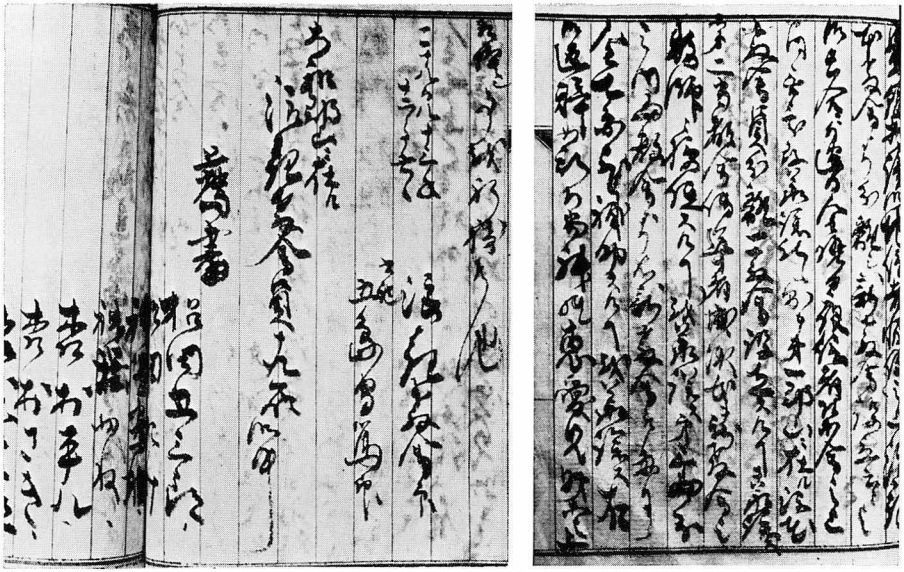
留学中の日記表紙（明治二十四年）







同上記事
（本文 500 頁）



大和郡山伝道記事（浪花教会記録）

貴翰拝読御地信者協議之上浪花
本教会より分離し新教会設立云々ト
御出合ニ而過日金曜日夜信者集会之上
一同無意致承諾仕候則チ第一郡山ニ在ル浪花
教会員分離一教会設立スルコトヲハ承諾ス
第二当教会伝導者成瀬氏ヲ新教会之
牧師ニ擔任スルコトを承諾ス第三当分
之内当教会より右新教会江毎月一
金七円宛補助スルコトを承諾ス右
御返辞如斯候尚神の御恵愛兄姉等之上
相増之事を祈禱候也

一千八百八十三年
十二月六日

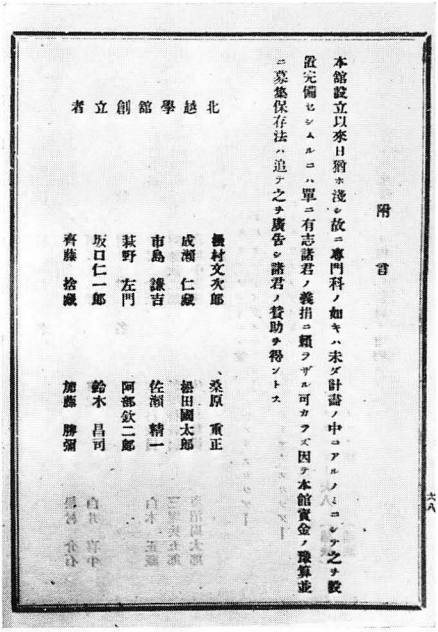
浪花教会　印
書記　五島守篤　印

大和郡山ニ在ル
浪花教会員十九名
御中

薦書

松田五三郎
松田たけ
神　為輔
神澤かね
森村平八
森村さき
（以下略）

新潟教会時代の先生（矢印）



附言

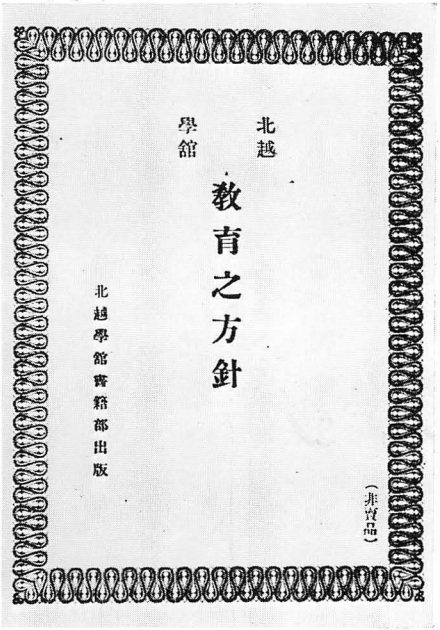
本館設立以來日猶ホ浅シ故ニ專門科ノ如キハ未ダ計畫ノ中ニアルノミニシテ之ヲ設置完備セシムルニハ單ニ有志諸君ノ義捐ニ頼フヘカラズ因テ本館實金ノ豫算並ニ慕恭保存法ハ追テ之ヲ廣告シ諸君ノ賛助ヲ得ントス

北越學館創立者

桑原　重正　　藤田國太郎
藤田國太郎
成瀬　仁蔵　　松田國太郎
三輪與五郎
市島　謙吉　　佐瀬　精一
白井　玉蘭
萩野　左門　　阿部欽二郎
坂口仁一郎　　鈴木　昌司
白井　宵平
齊藤　拾蔵　　加藤　勝彌
加藤　食ゆ

六八

同右　末尾の記事

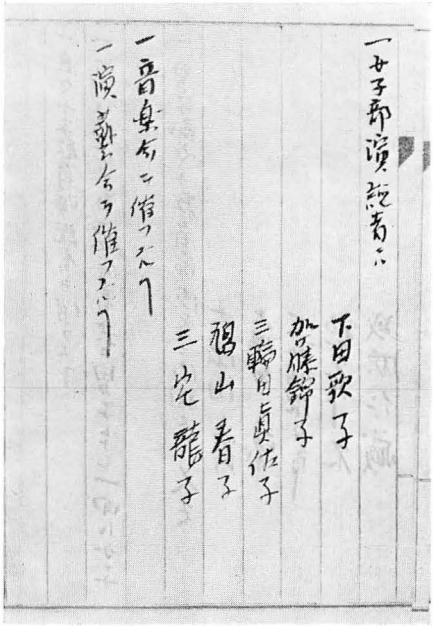


北越
學館
教育之方針

北越學館書籍部出版

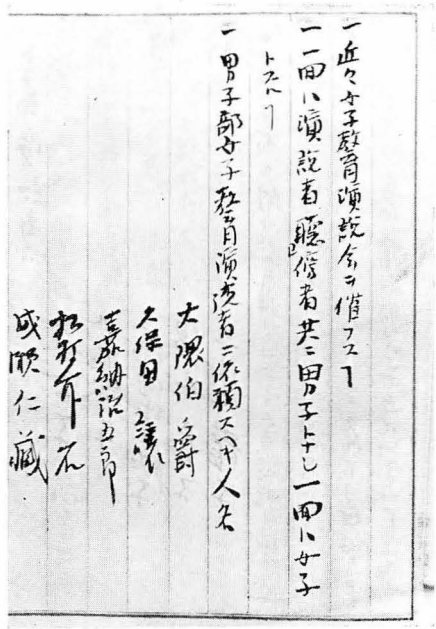
（非賣品）

北越学館学園案内（明治二十二年）

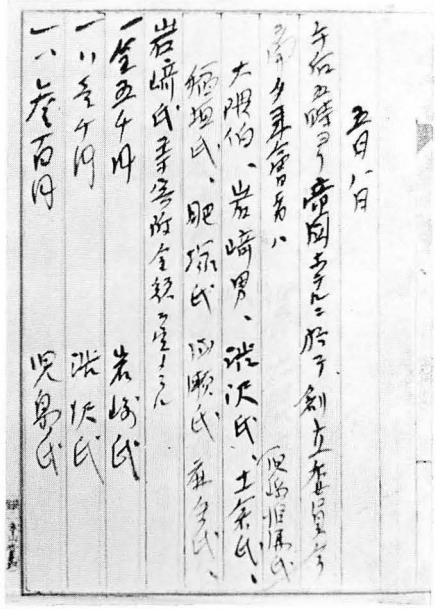


一女子部演説者ハ
下田歌子
加藤錦子
三輪田眞佐子
鶴山春子
三宅雪子
一音楽会ニ催フベシ
一演説会ニ催フベシ

（女子教育演説会・明治三十年）



一此々女子教育演説会ニ催フベシ
一両ハ演説者聴衆者共ニ男子トシ一両ハ女子
トスベシ
一男子部女子教育演説者ニ依頼スベキ人名
大隈伯爵
大保田議員
嘉納治五郎
坪内博士
成瀬仁蔵



五月一日
午後五時ヨリ帝国ホテルニ於テ創立発起員会
ヲ開ク
大隈伯、岩崎男、渋沢氏、土倉氏、
福地氏、肥塚氏、坪内氏、成瀬氏、
岩崎氏寄附金額ヲ定ム
一金五千円　岩崎氏
一〃金千円　渋沢氏
一〃金百円　吳服氏

同上（創立委員会・明治三十二年）

日本女子大学校寄附金簿表紙

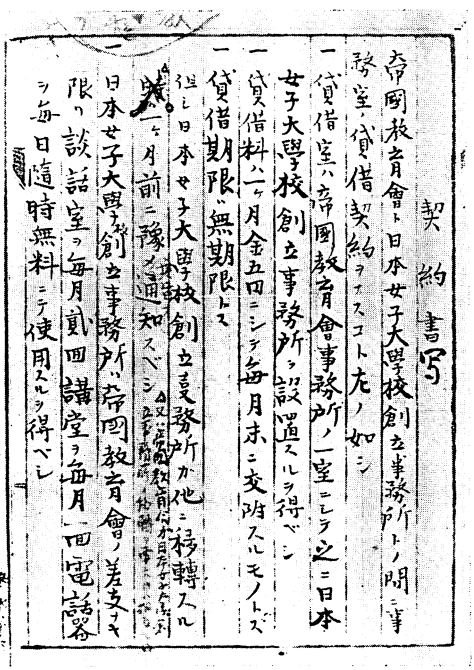
寄附金額	摘要	姓名
金五百圓	明治三十二年三月二十三日	近衛篤麿
金壱千円	明治三十三年十月八日	岩崎彦弥太
金千円	明治三十年五月吉日	大隈重信
金千円	明治廿二年五月三十日	峰須賀茂韶

五百圓		伊藤博文
金五千圓		三井八郎右衛門
金壱千円		三井壽
		副島種臣
	小石川区高田豊川町拾六番地 地坪四千八百八拾壱坪 但樹木其他附属ノ儘	三井家代 三井八郎右衛門

同上記事

麻生先生宛書簡（「女子教育」出版について・本文 262 頁）

「女子教育」（明治二十九年刊）



契約書写

帝國教育會ト日本女子大學校創立事務所トノ間ニ事務室貸借契約ヲナスコト左ノ如シ

一 貸借室ハ帝國教育會事務所ノ一室ニテ之ニ日本女子大學校創立事務所ヲ設置スルヲ得ベシ

一 貸借料ハ一ヶ月金五円ニシテ毎月末ニ支拂スルモノトス

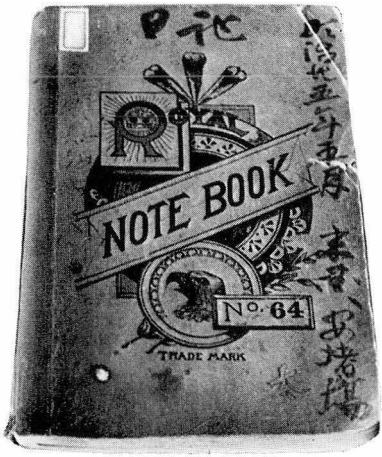
一 貸借期限ハ無期限トス

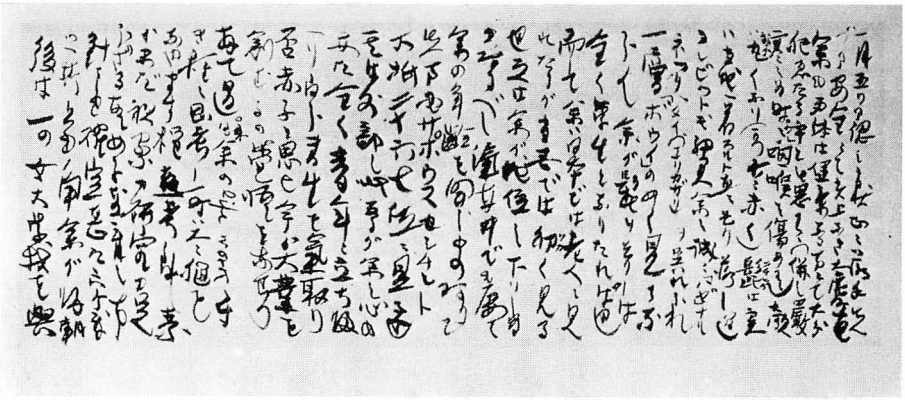
但シ日本女子大學校創立事務所カ他ニ移轉スル時ハ一ヶ月前ニ豫メ通知スベシ

日本女子大學校創立事務所ハ帝國教育會ノ差支ナキ限リ談話室ヲ毎月第四講堂ヲ毎月一回電話器ヲ毎日隨時無料ニテ使用スルヲ得ベシ

日本女子大学校創立事務所契約書

留学中の日記表紙（明治二十五年）





満寿枝夫人宛書簡（於米国・本文 255 頁）

序

本学七十周年記念事業の一つとして、かねて企画編集中でありました、創立者成瀬仁蔵先生の著作集が、いよいよ近く刊行のはこびにいたりましたことは、まことにご同慶に堪えません。これにより、すでに記念建造物として竣工した、大学図書館増築および七十年館建設に対し、内面的なかなめがしっかりと据えられたわけで、記念事業はここに、名実ともに完成を見るにいたったのであります。

私が日本女子大学校に入学いたしましたのは、昭和二年でありました。大正八年、創立者が逝去されてから、すでに十年の日子が経過しておりました。しかし、当時本学には、直接先生から教えを受けられた先輩の方々が、なお数多く残っておられました。特に当時の麻生正蔵校長から、実践倫理を通して私どもは、先生の遺響をうかがうことができたものです。ただ若い私は日本女子大における学生生活において、自分の勉学の方向を模索し、専門の学問の道に分け入ることで精いっぱいで、先生の存在が、自分たちには何か手の届かない、遠いはるかなものに感じられたことは、否めない事実であります。当時私どもは渡辺英一先生の著書「成瀬先生伝」を読むことを勧められ、忠実に読んだように思います。四十余年を経た今日、この書物を開いて見たところ、各所に鉛筆で線が引かれており、私の学生時代の精神的糧として、折にふれ、開いたものと思われます。

昨年四月、私ははからずも本学の学長に推され、理事長をも兼ねる身となりました。これは一学究の私にとって、実に容易ならぬ重い任務であります。爾来、日夜乏しきにむちうって苦闘しているのでありますが、最近になり成瀬先生の論文、講演集を繙き、先生の遺訓の一端にふれ、今更のように先生の偉大さに心を打たれるものであります。

先生は沢山の哲学書、宗教書から科学書まで、凡ゆる分野に渡って深く、広く読破し、刻苦勉励先生の確固たる信念をもってご自分の論説を確立されておられます。

最近になり、私は先生の著作の中から、次の一文を発見いたしました。

創造的能力の涵養には第一に徹底的研究心を養成することが必要である。この精神は一切を知り尽し、絶対に達せんとする人の根本要求に発するもので、事実の真相に徹底し、究極の真理に到達せずんば止まずという科学的良心、追求的興味、自発的意志はこれが要素である。又事物に対しては、実験観察を重んじ確実なる根拠を捕捉することは其の方法である。未だ曽て知られざりし新事実、新真理、新価値、新意識の発見は、全く此の徹底的研究の成果である。

「新時代の教育」の一部であります。私のように文字通り「実験研究」に明けくれ、ものの真実の追求を志す科学の道一筋に歩もうとする者には、打てば響くような啓示でありました。

現在、この混迷狂乱の時代にあって、静かにこの著作集を繙き、自らの求めるものをそこに求める時、先生の論文、講演は私どもの心の糧となることと信じます。成瀬先生著作集は、常に新しい生命の灯を内包する真理と信仰の書であることを固く信じて疑わぬものであります。

一九七四年　四月

日本女子大学学長　　道　喜美代

刊行によせて

日本女子大学は一九〇一年(明治三四)の創立であり、一九七一年(昭和四六)四月二〇日を以て創立七十周年を迎えた。これを機として創立七十周年記念事業が企画され、その多くはすでに実現されつつあるが、その中でも最も重要なものは、創立者成瀬仁蔵著作集の刊行である。何となれば、成瀬は明治時代の日本における女子高等教育の創始者として、その言行は今日最も注目されねばならないからである。

成瀬仁蔵は一八五八年(安政五)山口に生まれた。一八七七年(明治一〇)郷里の先覚者沢山保羅(ポーロ)によってキリスト教へ開眼され、直ちに大阪に出て、沢山らが設立した浪花教会において受洗すると共に、この教会が経営していた梅花女学校の主宰者となり、女子教育に傾倒した。成瀬は日本の堅実な発展は女子の高等教育の高揚によって達し得べきことを早くより確信し、極めておくれた日本の女子教育に彼の一生を捧げることを心に誓った。そして郡山、新潟の教会の牧師を歴任する間に彼の夢はふくらみ、女子大学設立の構想を抱くに至った。

しかしこの構想の実現の困難さに直面し、その実現の可能性を確めるために一九九〇年(明治二三)アメリカに渡り、四年間熱烈な研究に身を投じた。一八九四年(明治二七)帰国したが、日清戦争に当面し、女子大学設立の時期でないことを察し、隠棲して契友麻生正蔵と共に画期的な書『女子教育』を一八九六年(明治二九)刊行し、彼の女子教育の理想を世に問うた。

この書の理解者は初め少なかったが、先づ大阪の実業家広岡浅子によって注目され、彼女の力強い支持と成瀬の渾身の努力とにより、たちまちの間に彼の意図は当時の政界財界の有力者によって知られるに至った。そしてこれらの

人々の助力のもとに麻生正蔵の協力によって、ついに一九〇一年、東京目白の地に日本女子大学校を創立することができた。

これは日本において「女子大学」の名称を冠する最初の学校ではあったが、当時の文部省は女子の学校に大学令による大学の設置を許さず、その名称も「日本女子大学校」となった。この女子大学校が「日本」の名称を冠したのは当時日本に唯一の女子大学校であり、日本全国の志ある女子の進学を求める意味を示したものであったが、日本における女子大学の設立がいろいろな意味でいかに困難な状況におかれていたかを語るものでもあった。

成瀬はその初めキリスト教に入信したが、新潟時代に諸宗教の根源にあるユニヴァーサルな精神の存在に思いをいたし、さらにアメリカ留学時代に多くの人々との交流を通して、自己の確信をますます深めた。そして帰国後同志と共に帰一協会を設立した。彼独自の宗教的信念を多くの人々に理解させることは容易ではなかったが、彼は宗教、哲学、文学に強いあこがれを抱き、彼の宗教的信念を深めることに努力した。そしてこの信念によって、日本女子大学校において、新しいヒューマニズムの教育を樹立することに情熱を傾けた。彼が特に瞑想と詩とを愛し、詩作にも関心を持ったのは、こういう教育の創造者としての行動の詩人であったからに外ならない。彼は人間と教育の革新に燃えた。

成瀬は少年時代から自学自習を自己のモットーとして、常に新しい自己形成に生命を刻んだ。初め彼は人間の正しい生き方と理想とをキリスト教に見出し、次いで仏教、儒教、神道などの諸宗教にもこれを見た。しかしそれらの宗派の内に堕することなく、それらを貫いて、それらを超えようと努めた。かくして成立した彼の帰一協会の信仰と思想とを十分に理解することは困難であるかも知れないが、彼は宗派にとらわれないユニヴァーサルな神の存在を信じ、それに永遠の生命を見出し、それから生れ出づるヒューマニズムを彼自身の行動の原理とした。そしてそこにこ

そ世界人類の生くべき共通の大道があると彼は確信した。

この信念によって成瀬は死生一如の生涯に徹した。それは成瀬の独自性であり、行動の詩人としての成瀬の面目であった。

成瀬は日本の明治が生んだ時代の子でもあったが、生々（いきいき）とした新しい教育の創造者としての彼の幅広い豊かな言行は今後の日本教育の建設にとって意義深い示唆を与えるものであることをわれわれは改めて見直さねばならぬ。

本著作集の編集は日本女子大学創立七十周年記念事業実行委員会出版分科会を構成する編集委員の御努力によるものであり、また日本女子大学女子教育研究所の多大な御助力に負う。特に記して感謝の意を表す。

一九七四年　四月

前日本女子大学学長　有　賀　喜左衛門

「成瀬仁蔵著作集」は永遠に生きる

日本女子大学は、一九〇一年（明治三四年）、正に今世紀の初頭にあたって、東京目白の現地に誕生した。「成瀬仁蔵著作集」の内容もまた精神として、同時にこの地に誕生した。

かえりみれば、日本女子大学創立以来七十有余年、その間日本は、明治、大正、昭和と多くの国内的混乱や、国際的闘争にかかわり、激しい歴史的変貌を遂げた。特に第二次世界大戦の敗戦は、多くの混乱と試錬をもたらし、さらに朝鮮戦争を契機として経済の高度成長期を迎え、日本のＧＮＰは世界を驚嘆させるに至ったが、今やあらためて戦後日本の歩みがさまざまの角度から問われるという、複雑極まりない状況である。しかも日本近代の歴史は、常にアジアの、そして世界の動向の中に位置づけられている。現在、世界の問題は、同時に、日本の問題として考えられなければならない状勢にある。

日本の教育も、このような歴史と現状の中にあって今日何ものにもまして将来の日本を形成する重要問題として論じられている。

このような時点にあたって、日本女子大学の創立者であり、かつ日本の近代女子高等教育の先駆者である成瀬仁蔵先生の著作集が刊行されたことは、まことにその時宜を得たものといわねばならない。

先生は、実に当時のわが国の教育の実状を深く憂え、特に女子教育に教育の根本的課題を据え、そのため女子高等教育の充実と発展を目途として一つの教育機関を創設されたのである。即ち先生は、単に日本女子大学という一教育機関の存在を超えて、日本の将来をおもんばかり、日本の社会の全体的向上、発展を念願されたのである。しかも、

つねに世界の中に日本の状態を把え、同時に、決して世界の中に埋没しない日本を考えておられたのである。それ故、先生の言論は常に当時、教育界の鋭い注目をあび、女子教育の先駆者としてさまざまな創造的な構想を世に問われたのである。日本女子大学創立時代までを対象とするこの成瀬仁蔵著作集第一巻におさめられている諸論稿をみてもいかに先生が女子教育に対する遠大な理想と、あふれる情熱を抱かれていたかを知ることができる。

先生の女子教育の基本方針は、「人として」「婦人として」「国民として」女子を育成することにおかれていた。明治の時期における女子教育へのこの卓見は、先生の教育理想の深さを知ると同時に、比類のない先見の人であったことを思わざるを得ない。

今日の教育の危機的状況の中で、永遠に生きる精神をかぎりなく内蔵する成瀬仁蔵著作集の刊行を、私は心から喜ぶものである。

一九七四年　六月

元日本女子大学学長　上代　たの